

桜蔭俳話会 十一月句会(第三六〇回)

平成二十九年十一月十八日(土)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

一書に視点を集中させたい。

【添削案】

図書館の一書照らせし冬の雷

【推薦の句】

小春日や延命否と書き遣す

才美

小春日や陽明門の迷ひ人

友子

【鑑賞】

医療機関に提示される保険証の一部には、延命措置の可否について回答欄が用意されている。延命措置を講じた結果の実際を見聞している多くの人は、空欄とするか、「否」を選択しているようだ。これが毎年繰り返される。生きていくにも、それなりの覚悟が必要である。

マイナス面を詠むときには、主人公は自分にした方が良い。

【添削案】

小六月陽明門に迷ひけり

登校前挑戦続く二重跳び

ヤエ子

【理由】

言葉を整理して、リズム感出す。

【添削案】

登校や挑戦続く二重跳び

【自句自解の句】

蔵壁の動く一点冬の虫

守

北茨城地方に車で旅したときの一句である。昼食を頂いたその家は地方の名家であり、裏手には衣装蔵が残っていた。真白い壁に微動する一点を見付けた。

一卓に母を語れば夜の長し

才美

【理由】

「仮定」や「条件」を表す「ば」出来るだけ使用しない。

【添削案】

一卓に語る母ある夜長かな

父は子の視界に確と銀杏散る

才美

【添削の句】

【理由】

心配性の作者は、「確と」として句意を意識的に強めたが、父と子の関係性を強く言うとしても、「ありし」程度にあっさり言っても良いのではないか。

静かなる町を案内す赤蜻蛉

邦子

【理由】

言葉を整理して、リズム感出す。

【添削案】

静かなる町の案内(あない)や赤蜻蛉

父は子の視界にありし銀杏散る

父は子の視界の中に銀杏散る

木枯は家路にせかす母のよう

直子

【理由】

言葉を整理して、リズム感を出す。

【添削案】

凧や家路せかす母の声

【理由】

「埋める」と「砕く」の動詞の整理。

「登山」の季語性をより希薄化させる。

【添削案】

一歩づつ落葉砕きし山の道

小春日の柿の数ほど小鳥来る

ツル子

【理由】

季語の整理。一句に季語は一つ。

【添削案】

鈴生りの一木の実小鳥来る

図書館の万巻の書へ冬の雷

明美

【理由】

図書館に万巻の書があるとするのは陳腐。その内の

すそ分けの黒土光る小蕪かな ヤエ子

【理由】

言葉の整理。

【添削案】

隣より黒土光る小蕪かな

愚痴を言い己蔑む秋の暮 眞壽

【理由】

言葉の整理。

【添削案】

愚痴一つ腹に収めて秋の暮

職人のゼロサム社会神の留守 かほる

【理由】

意味の整理。搾取は社会のどの段階でも。

【添削案】

果てしなきゼロサム社会神の留守

歴代の院殿の墓椎木の実 幸

【理由】

言葉の整理。

【添削案】

歴代の院殿の墓木の実降る

熊笹に混じる紅葉アートのかな ヤエ子

【理由】

言葉の整理。

【添削案】

熊笹に点じる紅葉アートのかな

立木仏に籠る木の精冬眠す 友子

【理由】

言葉の整理。

【添削案】

冬眠や木の精揺する谷の風

百余年逝くヌマスギや秋の声 邦子

【理由】

言葉の整理。伐採される沼杉の音がするようだ。

【添削案】

百余年生きし沼杉秋の声

新幹線越後の平野切断す かほる

【理由】

言葉の整理。

【添削案】

新幹線雪の越後を真つ二つ

短日や庭師の半纏丸に鳶 ツル子

【理由】

言葉の整理。庭師の今の仕事。

【添削案】

○に鳶の半纏松手入

(文責代表増田守)

(欠席投句 古野明美、京林眞壽)

落葉時八割捨てる同居かな かほる

【理由】

言葉の整理。思い切った独自判断。

【添削案】

おほかたは捨てし同居や落葉期

秋刀魚焼き認知症予防コースへ 直子

【理由】

言葉の整理。

【添削案】

コースは「認知」の予防秋刀魚焼く